日本大学大学院総合社会情報研究科紀要　No.21, 049-059 (2020)

日本語教科書を利用した方言教材開発の可能性

―肥筑方言のカ語尾形容詞の場合―

佐藤　孝一
日本大学大学院総合社会情報研究科

The possibility of development in dialect teaching material utilizing Japanese textbooks

―In the case of *Ka-gobi* (Ka-tail) adjectives in *Hichiku* dialect―

SATO Koichi
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

The purpose of this study is to examine if the Japanese textbooks that are widely used by Japanese language educational institutions can be used as teaching material for dialect education. In this study, *Ka-gobi* (Ka-tail) adjective used in the northern and western regions of *Kyushu* is selected and researched as an example. Textbooks for beginners can easily incorporate into the adjectives in conversation practice and are considered to be effective as teaching material. However, textbooks for intermediate level students contains longer sentences, and even if the *Ka-gobi* (Ka-tail) adjectives are inserted into sentences, other grammatical elements will make the sentences unnatural. To use it as teaching material, it would be difficult to say that the textbook has easy to practice sentences.

1. はじめに

日本国内における日本語学習者は年々増加している。文化庁による日本語教育実態調査では、全国の日本語学習者数は2000年からのおよそ20年で約2.7倍に増えている。都道府県別に見ても、大多数の都道府県で増加しており、ごく一部の地域で起こっているものではない。

表 1　九州北部・西部 4 県の日本語学習者数の変遷
（文化庁 2000、2019 のデータより作表）

	学習者数（2000 年）	学習者数（2018 年）	学習者増加率
福岡県	2,664	13,587	5.1 倍
佐賀県	155	727	4.6 倍
長崎県	290	1,355	4.6 倍
熊本県	339	1,014	2.9 倍
全国	95,115	259,711	2.7 倍

表 1 は九州北部・西部における日本語学習者数の変遷である。全国の増加率が 2.7 倍であることを考えれば、表 1 で示された地域全体の増加率の高さがよく分かる。

地方で日本語を学ぶということは、その土地で生活をすることでもあり、日本語学習者にはその土地で用いられる方言を理解する必要が生じると考えられる。時に日本人でもなじみのない方言は理解するのが困難なこともある。まして日本語学習者はなおさら理解するのが困難であることは想像に難くない。自らが話す言葉は標準的な日本語で問題ないだろうが、その土地に住む人々が話す方言を理解するための学習や教育は必要であろう。しかし、地方での日本語学習者に方言教育が十分に行われているかというと必ずしもそうではないようである。

2. 先行研究

まず、「方言教育」の定義づけをしなければならない。本論文で取り上げる方言教育とは、日本語を学習する外国人に対するものであり、地域での伝承活動として日本人を対象に行われる方言教育とは異なる。

まず、方言教育に関する先行研究から、日本語学習者、日本語教育者双方の方言ならびに方言教育に関する意識を確認し、方言教育を実施するためには何が必要であるのか考えてみる。

2.1 日本語学習者の方言に対する意識と理解度

日本語学習者の方言に対する意識について見てみる。高村・内藤（2016）では関西地区の留学生を対象に方言への意識調査を行っている。この中で、関西方言を学びたいという学習意欲を持った学生が多いことが報告されている一方で、生活の中で標準的な日本語よりも関西方言のほうが理解できないという結果も出ており、理解できないことが学習意欲につながっている可能性があると述べている。また、関西方言に対する学習意欲を持っている学生は、自分が好きな土地に住んでいる人と仲良くなるためには方言が有効であると考えており、大学の授業で学びたいと希望している者が多いことも分かった。

内丸他（2013）では、岡山地区の留学生に対して地域方言に関するアンケートを行っている。この中で留学生は、岡山の方言が分からなくても困ることはないとしながらも、方言での会話が親密な友人関係の構築を促進すると考える留学生が多く、友好的な関係を築くために方言を学びたいと考えている留学生が多いことを明らかにしている。

立川（2014）では、茨城県龍ヶ崎地区の留学生に対して行った方言に関するアンケートについて報告している。その中で、方言を聞いた経験は少ないものの、方言で困った経験があると答えた割合は非常に高く、方言を学習して、方言を理解し、話せるようになりたいと望む留学生が多いと報告している。さらに、留学生の方言理解について、文脈から方言の意味を理解しているようだが、標準的な日本語と同型で異なる意味を持つ方言は理解が難しいと考えられるため、体系的な方言教育が必要であるとしている。

このように、留学生への方言に対する意識調査からは、留学生が方言への理解力を高め、それによって親密な人間関係を構築したいという考えから、方言を学びたいという意欲を持っていることが分かる。つまり、留学生は人間関係の構築に方言理解が必要であると思っているのである。しかし、そう思っている反面、方言に対する理解度については高いとは言い難いようである。

方言教育の実施に関する研究には今井（2016）がある。高知県香美市で外国人農業技能実習生（以下、「実習生」）に対して行った方言学習の実施状況について報告しており、この中で、まず帰国間際の実習生へのアンケート結果報告があり、そのなかで、「お父さんがいつも使うから、次の実習生はもっと土佐弁の勉強をするべきだ」（p.69）という実習生からの意見を紹介している。また、実習開始前の実習生に対するアンケートからは、実習生は方言が難しいと感じており、学習自体は役に立つという感想を持っていることが分かった。

後藤他（2010）では、山形県において介護施設利用者と留学生の会話から、その実態を分析している。その中で、留学生は理解できない言葉があっても会話を途切れさせないような努力をしていたと評価をしている。しかし実際には、聞き取りが難しい音、語形変化した地域語、またそれらが複合的に表れるものが多く、一見介護施設利用者との会話に問題ないように見られたが、実のところ、留学生は介護施設利用者が話すことがあまり理解できていなかったと結論づけ、これは地域語、つまり方言が影響していると付け加えている。

上條（2000）は、長野県松本地区の留学生に対して、方言をどの程度認識しているか調査を行い、標準的な日本語を方言だと認識している場合があると言及しており、結論として「周囲の日本人は外国人留学生に向かって方言を大分使っている（中略）外国人留学生が日本での生活をしていくためには、方言をある程度理解することが必要である。より効果的な方言指導を考えていくべきである」（p.49）と述べている。

留学生にとって方言理解は難しいものである。加

えて、その難しさゆえに、標準的な日本語の理解が方言の干渉によって妨げられることがあってはいけない。このことと、方言を理解することが良好な人間関係の構築の一助になるものと考えており、そのために方言を学びたいという意欲を持っている日本語学習者が少なからず存在することも鑑みれば、教育機関等が体系的に方言を教える機会を作るべきであろうが、実際には十分に方言教育が行われているわけではなく、これはやはり問題があると言えるだろう。

2.2 日本語教育現場における方言教育に対する意識

教育機関において方言を学ぶ機会を作っていないのには何か原因があるのだろうか。

細川（1992）は金沢市内の日本語教育機関において、日本語教師に対して方言教育に対する意識調査を行っている。まず、教室内で標準的な日本語と方言どちらを優先して教えるべきかという問いには、ほとんどの教師が標準的な日本語を優先するべきであると答えている。しかし、方言を教えることについては、積極的に教える立場の教師と必要であれば教えるというやや消極的な立場を示す教師の両方が存在した。方言を教える場合に、どの時期に教えるのが良いのかについては､様々な意見が提起された。また､方言の具体的な教授法が不明であるがゆえに、方言教育に対応できないと思っている教師がいることも述べられている。このように、日本語教師の間では方言を教えることに異議を唱えることはないが、その教授方法に多様な考え方があり一定ではないことが分かる。

今井（2016）では、高知県香美市が受け入れた農業技能実習生に対する方言授業で使用した教材について報告がなされている。まず 2000 年に『高知の生活語』という初級終了程度の日本語学習者を対象とした教科書が最初に作成された教材である｡その後、学習者のニーズなどを勘案して 2002 年、2003 年と改訂版を作成している。しかしその後、実習生の受け入れの増加に伴い、教科書の改訂が追いつかない状態になっており、「手直しにはほど遠い状況である」（p.75）と述べている。また、フィリピン人実習生に対しての英語翻訳版の必要性も出てきており、教材内容の充実を図るためのエネルギーが大きいことが分かる。このように教科書の改訂が追いつかない状態であるため、大学や公的機関の協力を仰ぎながら作り上げていくことを望んでいると述べられている。

山口県内に住む外国人を対象に作成された『おいでませ山口』という日本語教材が発行されている。市販の教科書ではなく、地域の公的・私的団体の助成で作成された地域密着型日本語教科書である。1994 年の初版以降改訂を数多く重ねて、現在 4 分冊が発行されている。地域性を重視した上で市販の教科書の汎用性を引き継いでいるもので、方言教育を目的としているわけではないが、付録として方言を解説している。教科書の内容については「分冊が進むにしたがって地域方言を扱うページが増えてもよさそうに思われる」（pp.122-123）と述べている｡『おいでませ山口』の特徴の一つが多くの助成団体からの経済的サポートによって成り立っていることである。林（2010）はこの教材について「教科書会社としては採算の面からローカルテキストには手を出せない（中略）教科書会社に期待できない、ローカルテキストの作成は、地域社会のサポートを得て作成するしかない」（p.122）と述べている。このように、『おいでませ山口』は地域との連携がうまくいっている好例だと言えるが、全ての地域で『おいでませ山口』のように、教材の作成のために、地域のサポート、特に経済的なサポートが十分に受けられるわけではないだろう。

教育の現場では日本語学習者への方言教育の必要性を認めながらも、その実行に難しさを感じていることが窺える。教材作成にかかる費用の面での経済的な負担、教材の改訂など内容の充実を図るためにかかる作業時間の捻出の困難さ、また地域によっては､その地域の方言に対する知識や研究の不足など、方言教育の実施にあたり乗り越えなければならない課題が教育現場からは少なからず見えてくる。これら課題の解決のために、その方法を考察するのは研究に値するものであろう。

3. 研究の目的

地方で学んでいる学習者、また地方に住んでいる学習者においては、動機は多様ではあるが、方言を学び、理解したいという希望をもっている者がいる。しかし、方言を学ぶ機会が十分に与えられているとは言い難い状況である。教える側も教材を作成するなど、方言教育に積極的に関与する姿勢を見せており、日本語学習者に対する方言教育の実践報告や、教材作成の過程と成果の報告などが存在する。ただ、まだ方言を教えるための教材は十分ではなく、さらに、そのための教材を開発する時間的、経済的負担、そして、標準的な日本語を優先に教えなければならないことから生じる方言教育に対する教師の負担感は大きいと言わざるを得ない。

そこで、本論文では、方言教育に対して教師が持つ次の二つの負担を軽減するための教材開発について考察する。

- 教材開発の負担
- 標準的な日本語との同時教授の負担

これら二つの負担を軽減できれば、教育現場で方言教育の機会が増え、方言を学び、理解できるようになりたいという日本語学習者の希望に応えることが可能になるだろう。

本論文では大学、日本語学校、日本語教室等で広く一般的に使用されている市販の日本語教科書を使って、その教科書にある例文や会話練習のための対話文を方言に変換して、その方言に変換された会話文が授業等で有効に使えるものになっているかどうかを考察する。市販の日本語教科書を使うことで、教材開発の負担が減るとともに、標準的な日本語とは異なる教材を使うことなく、方言が教えられるという利点を得ることができると考える。

方言と言っても、日本全国の方言を取り上げて考察することは難しい。そこで、第1章で述べた、日本語学習者が特に増加している九州北部・西部4県（福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県）地域の方言の主流になっている肥筑方言を取り上げる。肥筑方言には標準的な日本語とは異なる体系を持つ要素がいくつか存在する。その中で形容詞と形容動詞は「カ語尾形容詞」（神部1980）と呼ばれ、標準的な日本語とは異なる活用形を持ち、そしてその活用形には一定のルールが存在する。そこで、初めに先行研究からカ語尾形容詞の特徴のまとめを行い、そのまとめから導き出された活用形のルールを標準的な日本語の形容詞並びに形容動詞と比較する。さらに、比較の結果を参考にしながら、教育機関等で用いられている日本語教科書の例文や会話練習文の形容詞と形容動詞をカ語尾形容詞に変換して、その変換した例文や練習文が方言を教えるにあたって有効なものになりえるかどうか考察する。

4. カ語尾形容詞の特徴

神部（1980）を参考にして、肥筑方言の特徴の一つであるカ語尾形容詞について詳しく述べる。なお、本論文は日本語学習者に対する方言教育をテーマにしているので、品詞名や接続形の呼称などは日本語教育で一般的に用いられているもので表す。形容詞、形容動詞に関しては、形容詞はイ形容詞、形容動詞はナ形容詞とそれぞれ言い換えて分類する。

カ語尾はイ形容詞のものだけではなく、ナ形容詞にも見られる。しかし、イ形容詞のカ語尾に比べると、ナ形容詞のカ語尾化には様々な形が存在する。これは古語形容詞のカリ活用の名残がカ語尾であるため、カリ活用がないナ形容詞には本来適用されないはずなのだが、歴史の流れの中でナ形容詞にもカ語尾化の動きがあったものと推測される。しかし、その動きの考察に関しては別の機会に譲り、ここからは、イ形容詞とナ形容詞のカ語尾形について例を挙げながら詳しく説明する。

4.1 イ形容詞について

イ形容詞は、「青い」「寒い」など名詞の前で「～い」をとる形だが、肥筑方言のカ語尾形はこの「～い」が「～か」になる。例えば、「青い」は「青か」、「寒い」は「寒か」のようになる。イ形容詞は文末に用いる場合と、名詞修飾で用いる場合がある。文末に用いる場合のカ語尾への変換は例 1 のようになる。

例 1：今日は寒いです。→　今日は寒かです。

名詞修飾の場合でも、上記と同じように「～い」の部分を「～か」に変えるだけでカ語尾を用いた文を作ることができる。

例 2：
その青いシャツ、いくらですか。
→　その青かシャツ、いくらですか

「いい（良い・好い)」に対する「よか（良か・好か)」、「ない（無い)」に対する「なか（無か)」は肥筑方言ではもっとも根強く残存するカ語尾形容詞である。特に「なか（無か)」は形容詞の否定形を作る際に重要な点になる。否定形の場合語幹はウ音便化する場合がある。例えば「寒くない」は「寒うなか」、「おいしくない」は「おいしうなか」となる。

例 3：
あまり寒くないですね。
→　あまり寒うなかですね。

これまでのイ形容詞の説明をまとめると、その活用は表 2 のようになる。

表 2　イ形容詞の活用（文末の場合）

		肯定	否定
非過去	標準	～いです	～くないです
	カ語尾	～**か**です	**～く（もしくはウ音便）+なか**です
過去	標準	～かったです	～くなかったです
	カ語尾	～かったです	**～く（もしくはウ音便）**+なかったです

*名詞修飾の場合は、「～です」を取り除く

4.2 ナ形容詞について

日本語教育文法におけるナ形容詞もカ語尾を取ることが多い。しかし、イ形容詞のように「～い」を「～か」に変換するというような唯一のルールだけで、全てのナ形容詞のカ語尾化はできない。

イ形容詞のカ語尾化ルールと異なるものの一つ目として挙げられるのは、ナ形容詞は文末で用いられる場合と名詞修飾として用いられる場合とで、異なる変換規則が存在する。

標準的な日本語においてナ形容詞が名詞を修飾する場合は、「ナ形容詞+な+名詞」の形（例えば、「簡単な問題」）である。カ語尾の場合は例 4 のように「～な」を「～か」に変える。

例 4（名詞修飾の場合）：
今日の試験は簡単な問題ばかりだった。
→　きょうの試験は簡単か問題ばかりだった。

このように名詞修飾の場合は「～な」を「～か」に変換することでカ語尾の形にできる。他に例を挙げれば、「元気な人」を「元気か人」、「便利な道具」を「便利か道具」とすればカ語尾の文が成立する。

一方、ナ形容詞が文末になる時は、標準的な日本語の場合は「ナ形容詞+だ（です)」の形（例えば、「この問題は簡単です」）である。これをカ語尾にする時は、文末が「です」の時と、「だ」の時とで、カ語尾化ルールが異なる。

文末が「です」の場合は、例 5 のように「ナ形容詞+か+です」というように「か」を「ナ形容詞」と「です」の間に挿入する。

例 5（文末「です」の場合）：
このプログラミングは複雑ですね。
→　このプログラミングは複雑かですね。

しかし、文末に「だ」を使う場合は、「ナ形容詞+か+だ」とはならず、例 6 のように「ナ形容詞+か」となる。

例 6（文末「だ」の場合）：
このプログラミングは複雑だ。
→　このプログラミングは複雑か。

ナ形容詞がイ形容詞のカ語尾化ルールと異なる点の二つ目は、これまで示した変換ルールに沿わない変則的な変換方法によってカ語尾形になるナ形容詞

が存在することである。

神部（1980）でも指摘されているが、例えば、「変な＜名詞＞」は、例 4 にあるような変換規則を当てはめるならば「～な」を「～か」にして「変か＜名詞＞」となるはずである。しかし、実際には例 7 のように「変な」に「か」を加えて「変なか＜名詞＞」となる。

例 7：
変な服装はしないでください。
→　変なか服装はしないでください。

もう一つ特殊な変換規則を持つナ形容詞を挙げると、「きれいな」がある。名詞修飾の場合は「きれいか花」と「～な」を「～か」に変換し、文末用法の場合は「か」を挿入して、「この花はきれいかです」なる。しかし、この用法だけでなく、「きれい」の「い」を「～か」に変換して例 8 のように「きれか」という使い方も存在する。

例 8（文末「です」の場合）：
この花はきれいです。→　この花はきれかです。

「きれいか」と「きれか」では、どちらが正しい用法なのかという疑問も出てくるだろう。まず「きれいか」の根拠としては、国立国語研究所が 1966 年に刊行した『日本言語地図』第 47 図の凡例に「KIREEKA」と示してある。「KIREEKA」は 4 音節の「きれいか」に当てはまるが、凡例に示してあるということは、その「KIREEKA」を使う地域が存在しており、実際に、肥筑方言区画の西部と南部にあることを示している。

「きれか」の根拠として二つ挙げる。一つ目は土産品として「綺麗菓」という商品名を「きれか」と読ませて販売している（図 1）。

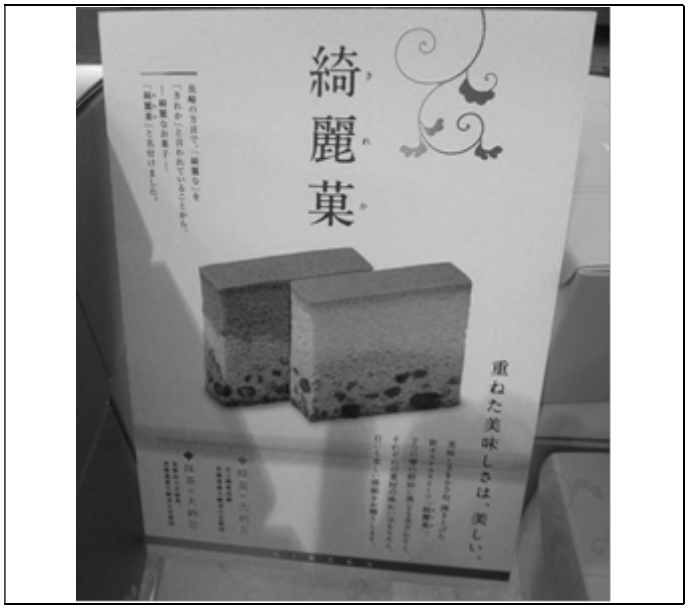

図 1　綺麗菓（きれか）
筆者撮影

二つ目は、Twitter 上のつぶやきにも「きれいか」と「きれか」両方が見られる。「きれか」を使ったつぶやきには次のようなものがある。

今日もまた。ネルタン、月のきれかよ[1]

『日本言語地図』では「きれか」に相当する凡例は提示されていないために、「きれか」というカ語尾形としては存在しないように思われるが、商品名や Twitter のつぶやきに見られるように、様々な場面で「きれか」を使用している。「きれか」「きれいか」どちらが正しいのか、あるいはどちらが主流なのかという考察は別の機会に回すことにして、本論文では「きれい」「きれいか」2 通りの用法を採用して考察していくことにする。

ここまで説明してきたナ形容詞のカ語尾形の活用を表にまとめると、表 3 と表 4 のようになる。

[1] https://twitter.com/chiyomamanosu/status/1172467767150120960（閲覧日 2020 年 5 月 5 日）

表 3　ナ形容詞の活用（丁寧形文末の場合）

		肯定	否定
非過去	標準	～です	～じゃありません
	カ語尾	～**か**です	～じゃ**なか**です
過去	標準	～でした	～じゃありませんでした
	カ語尾	～でした	～じゃありませんでした

表 4　ナ形容詞の活用
（普通形文末と名詞修飾の場合）

		肯定	否定
非過去	標準	～だ／～な	～じゃない
	カ語尾	～**か***	～じゃ**なか**
過去	標準	～だった	～じゃなかった
	カ語尾	～だった	～じゃなかった

*「変なか」「きれか」等、変則的変換が存在する。

5. 日本語教科書を使用した方言教育の一例

第 4 章でイ形容詞とナ形容詞のカ語尾の特徴を掴んだ。本章ではそれらを踏まえて、一般に日本語教育機関等でよく使用されている日本語教科書を用いて方言を教えることが可能か考察する。なお、会話の役割練習をする際には、会話参加者すべてをカ語尾話者にするのではなく、標準的日本語話者とカ語尾話者のパートを交互に割り当て会話練習をさせる。これは、実際の会話の中では、日本語学習者がカ語尾を話すというよりも、日本語学習者が日本語母語話者の話すカ語尾を聞いて理解しなければならないこと想定しているためである。

5.1『みんなの日本語　初級 I』を使用した例

スリーエーネットワーク社発行の『みんなの日本語』は「職場、家庭、学校、地域など日本語によるコミュニケーションを今すぐ必要としている外国人」（p.iii）を対象としており、多くの日本語教育機関が主教材として採用している。

『みんなの日本語　初級 I』で形容詞が取り扱われる課はいくつかあるが、第 8 課は形容詞の基本的な文型が提示してあり、初級で最初に形容詞を学ぶ課にもなり得る。カ語尾形容詞の教材にできるかを考えるうえでは、基本の文型がカ語尾形容詞に変換できるかが最初の関門でもあるので、第 8 課で提示されている文型についてカ語尾形容詞への変換を試みる。さらに、会話、そして、練習問題のうち一つを抜粋して、教科書内のイ形容詞・ナ形容詞からカ語尾形容詞への変換を試行してみる。なお、初級教科書のため、掲載されている多くの漢字にはルビが振ってあるが、本論文ではルビは割愛する。また、例文や会話文の中にあるカ語尾形容詞には二重下線を引いた。

(1)『みんなの日本語　初級 I』第 8 課　文型 (p.66) より、基本文型を導入するための例文から、カ語尾形容詞への変換を考えてみる。まず教科書の内容は次の通りである。

1. 桜はきれいです。
2. 富士山は高いです。
3. 桜はきれいな花です。
4. 富士山は高い山です。

第 8 課で提示された 4 つの文型をカ語尾にするには次のように変換する。

1. 桜はきれか（きれいか）です。
2. 富士山は高かです。
3. 桜はきれか（きれいか）花です。
4. 富士山は高か山です。

ナ形容詞「きれい」については、「きれか」「きれいか」両方の用法が存在するので、両方提示する必要がある。「高い」のカ語尾「高か」は「たっか」のように促音化することもあるので、学習者に発音の変化について説明しなければならないだろう。第 8 課の文型の文章は短く、カ語尾形容詞への変換も容易である。また、カ語尾化した文章も自然な文だと言えるだろう。

(2)『みんなの日本語　初級 I』第 8 課　会話 (p.67) より、日常生活で遭遇する場面での会話練習から、その会話文の形容詞をカ語尾形に変換して、会話練習に適切なものになりうるか考えてみる。教科書の内容は次の通りである。

山田一郎：マリアさんはもう日本の生活になれましたか。
マリア･サントス:ええ。毎日とても楽しいです。
山田一郎：そうですか。サントスさん、お仕事はどうですか。
ホセ・サントス：そうですね。忙しいですが、おもしろいです。
山田友子：コーヒー、もう一杯いかがですか。
マリア・サントス：いいえ、けっこうです。
ホセ・サントス：あ、もう、8 時ですね。そろそろ失礼します。
マリア・サントス：きょうはどうもありがとうございました。
山田友子:いいえ。またいらっしゃってください。

この会話文には 3 つのイ形容詞（波線部）が含まれている。これらをカ語尾にするには次のように変換する。

山田一郎：マリアさんはもう日本の生活になれましたか。
マリア･サントス:ええ。毎日とても楽しかです。
山田一郎：そうですか。サントスさん、お仕事はどうですか。
ホセ・サントス：そうですね。忙しかですが、おもしろかです。
山田友子：コーヒー、もう一杯いかがですか。
マリア・サントス：いいえ、けっこうです。
ホセ・サントス：あ、もう、8 時ですね。そろそろ失礼します。
マリア・サントス：きょうはどうもありがとうございました。
山田友子:いいえ。またいらっしゃってください。

イ形容詞は「～い」を「～か」に変換するというシンプルな規則が適用できるので、教科書の会話文は比較的簡単にカ語尾形容詞を使ったものに変えることができ、さらに会話練習も行うことができる。強いて問題点を挙げるならば、この第 8 課の会話文では、外国人であるマリア・サントスとホセ・サントスの役をする学習者がカ語尾形容詞を使って練習するので、聞いて練習するというより話して練習することになる。学習者が日本人の方言を聞いて理解するという目標が置かれているので、学習者にやや目標がずれてしまっているように受け取られるかもしれず、この練習に学習者が疑問を抱くかもしれない。しかし、聞くことと話すことの練習を両方行うことで、方言に対する理解力を高められるはずである。教室活動の中で、教師が学習者にこの会話練習の意義を説明する必要があるだろう。

5.2『新日本語の中級』を使用した例

海外産業人材育成協会編著『新日本語の中級』は 2000 年に発行され、初級レベルを終了した学習者が「実社会で役立つ実践的会話能力を身に付け、日本人との豊かなコミュニケーションができることを目指して」(p.3) 作成された教科書である。

本論文では、『新日本語の中級』の中にある会話練習に特化して、カ語尾形容詞を用いた会話練習が可能かどうかを考察する。なお、イ形容詞とナ形容詞には波線を引いた。

(1)『新日本語の中級』第 19 課　会話 2 (p.253)

佐々木：小川さん、残業？
小川　：うん。片付けなくちゃいけない仕事がたまってね。
佐々木：大変だね。
小川　:佐々木さん、実は僕、今度転勤なんだよ。
佐々木：えっ、転勤！
小川　：うん、それがすごい田舎なんだよ。
佐々木：へえ、そう。でもいいよ、田舎は。水もおいしいし、空気もきれいだし・・・
小川　：でもやっぱり僕は都会の方がいいな。
佐々木：そう？でも田舎の方が住みやすいよ。物

価も安いし、家も広いし・・・
小川　：ううん・・・だけど子供の教育のこともあるしね。
佐々木：でも、田舎の方が子供の健康のためにはいいよ。
小川　：うん、確かにそうかもしれないけど、受験のことを考えると、やっぱり都会の方が有利だと思うんだよね。
佐々木：まあそれはそうかもしれないけど、僕なんか田舎生まれだから、やっぱり田舎の方が好きだな。
小川　：ううん・・・そうだね。
佐々木：きっと子供にとってもいいと思うよ。
小川　：そうだね。

会話 2 のイ形容詞・ナ形容詞をカ語尾に変換すると次のようになる。なお、佐々木のパートをカ語尾話者として想定して練習するため、佐々木のパートだけカ語尾形容詞に変換した。

佐々木：小川さん、残業？
小川　：うん。片付けなくちゃいけない仕事がたまっててね。
佐々木：大変かね。
小川　：佐々木さん、実は僕、今度転勤なんだよ。
佐々木：えっ、転勤！
小川　：うん、それがすごい田舎なんだよ。
佐々木：へえ、そう。でもよかよ、田舎は。水もおいしかし、空気もきれか（きれいか）し・・・
小川　：でもやっぱり僕は都会の方がいいな。
佐々木：そう？でも田舎の方が住みやすかよ。物価も安かし、家も広かし・・・
小川　：ううん・・・だけど子供の教育のこともあるしね。
佐々木：でも、田舎の方が子供の健康のためにはよかよ。
小川　：うん、確かにそうかもしれないけど、受験のことを考えると、やっぱり都会の方が有利だと思うんだよね。
佐々木：まあそれはそうかもしれないけど、僕なんか田舎生まれだから、やっぱり田舎の方が好きだな。
小川　：ううん・・・そうだね。
佐々木：きっと子供にとってもよかと思うよ。
小川　：そうだね。

まず、教科書で「空気もきれいだし・・・」の「きれいだ」であるが、繰り返し述べてきた通り「きれか」と「きれいか」の二つの用法を説明しなければならない。また、「でもいいよ」、「健康のためにはいいよ」、「子供にとってもいい」の「いい」は「良い（よい）」のカ語尾形の「よか」になる。その他の下線部については、イ形容詞とナ形容詞のカ語尾変換規則にのっとりカ語尾化した。

ここで一点説明が必要なのは、「田舎の方が好きだな」の「好き」（網かけ部）である。「好き」はナ形容詞で、本文では「好きだな」と普通形なので、ナ形容詞のカ語尾変換ルールを適用すれば「好きだ」が「好きか」となり、カ語尾化された文章は「やっぱり田舎の方が好きかな」となりそうだが、「好きな」にはカ語尾形が存在しないため、「好き」についてはカ語尾形に変換する必要はない。この「好きな」については、肥筑方言では「好いとる」という表現が使われる。これは形容詞ではなく動詞の扱いである。国立国語研究所が発行した『方言文法全国地図』でも、「酒が好きだ」をどう言うかという調査に、肥筑方言区画内では「さけが（ば）すいとる」という表現が多く使われていることが示されている。

次に小川のパートをカ語尾話者として想定して練習するために、小川のパートだけカ語尾形容詞に変換した。

佐々木：小川さん、残業？
小川　：うん。片付けなくちゃいけない仕事がたまっててね。
佐々木：大変だね。
小川　：佐々木さん、実は僕、今度転勤なんだよ。
佐々木：えっ、転勤！
小川　：うん、それがすごか田舎なんだよ。
佐々木：へえ、そう。でもいいよ、田舎は。水もおいしいし、空気もきれいだし・・・
小川　：でもやっぱり僕は都会の方がいいな。

佐々木：そう？でも田舎の方が住みやすいよ。物価も安いし、家も広いし・・・
小川　：ううん・・・だけど子供の教育のこともあるしね。
佐々木：でも、田舎の方が子供の健康のためにはいいよ。
小川　：うん、確かにそうかもしれないけど、受験のことを考えると、やっぱり都会の方が有利かと思うんだよね。
佐々木：まあそれはそうかもしれないけど、僕なんか田舎生まれだから、やっぱり田舎の方が好きだな。
小川　：ううん・・・そうだね。
佐々木：きっと子供にとってもいいと思うよ。
小川　：そうだね。

小川のパートは佐々木のパートよりも形容詞が少ない。「すごい」のカ語尾形「すごか」、「有利だ」もカ語尾形「有利か」は変換規則通りだが、「都会の方がいいな」の「いいな」（網かけ部）については、「いい」のカ語尾形の「よか」に変換したいところだが、「よかな」という使い方が存在しない。この場合、「～な」とは別の接尾辞を使うか、あるいは、肥筑方言区画内で使われる文末詞を接尾辞「～な」の代わりに用いなければならない。本論文ではカ語尾形容詞だけを取り扱っているので、ここでは文末詞の説明はあとに譲るものとするが、このように、イ形容詞・ナ形容詞だけカ語尾化しても、会話表現が肥筑方言のものとは一致しないおかしな文章になることもあるので注意が必要である。

6. 結論

本論文では、地方に住む日本語学習者の方言理解の一助となることを目指して、九州北部を中心に使われている肥筑方言を例にして、日本語教育機関で広く使われている教科書で方言を教えることが可能かどうか考察してきた。

初級用教科書の『みんなの日本語　初級 I』第 8 課ではイ形容詞・ナ形容詞ともにカ語尾形容詞への変換規則をあてはめれば、例文や会話文が成立することが分かった。これは初級の学習過程では、例文や会話文が短く、また一つの単元がイ形容詞・ナ形容詞に特化した内容になっているため、他の文法要素が例文や会話文に含まれておらず、カ語尾形容詞を教科書の内容に落とし込みやすかったためと考えられる。このことから、初級教科書では、方言の他の文法要素も標準的な日本語との変換規則を見つければ、日本語教科書への落とし込みも容易で、教材としても成立するだろう。つまり、一から方言教材を作る必要はなく、教材作成の負担を軽減できるだろう。

中級用教科書『新日本語の中級』では、一つの文章も長くなり、その文中に含まれる品詞や文法要素も初級に比べると多くなる。そのため、イ形容詞・ナ形容詞だけを方言に変換すると不自然な文章になる場合もある。中級またはそれ以上のレベルの教科書については、文章の一部を方言に変換するのではなく、文章全体を方言に変換するように考えて教材として使えるようにしなければならないだろう。これは教える側にとって教材作成にかかるエネルギーの軽減とまではいかないかもしれない。また、標準的な日本語と同時に教えられるかという点については、文章が長くなることによる文法要素と語彙量の増加により、学習者の混乱を招く危険がある。この点については教育現場で混乱を引き起こさないような取り組みが必要になるであろう。

肥筑方言のカ語尾形容詞に特化して、一般によく使われている教科書を用いて、標準的な日本語を方言に置き換えて、教材として使えるものになり得るか検討してきた。この研究の結果から見えてきたのは、中級以上の教科書を使う際に方言をどう提示していくのか、どのように教材を作成するのかが課題となった。また、今回の研究では、日本語教科書に方言を落とし込んで、教材として成立するかどうか検討するところまでを行った。今後はこのような方言を落とし込む作業の実践と、方言教材化した日本語教科書を使った授業の実践を行い、教材を作成する教える側の負担が軽減されるのか、また、学習者が方言理解を深めることができるのか確認をする必要があるだろう。

参考文献・資料

井上史雄（1999）『九州方言考　3　長崎県　日本列島方言叢書』25　ゆまに書房
今井多衣子（2016）「外国人農業技能実習生の地域語表現の学習方法－高知県香美市の場合－」『高知大学留学生教育』10, pp.63-77
内丸裕佳子・石井真子・作本晴恵・松友弥・林美延・大塚詩乃・興津芽衣・高原一恵（2013）「上級会話クラスにおける日本語のバリエーション教育について」『日本語教育方法研究会誌』20(1) , pp.78-79
海外産業人材育成協会（2000）『新日本語の中級』
上條厚（2000）「松本地区外国人留学生が認識する方言」『信州大学留学生センター紀要』1, pp.43-49
神部宏泰（1980）「九州西部方言の形容語－カ語尾形容詞を中心に－」『国語教育研究』2（上）, pp.536-546
国立国語研究所（1966）『日本言語地図』1
国立国語研究所（1993）『方言文法全国地図』3　活用編 2
後藤典子・熊坂聡・三瓶典子・澤恩嬉・齋藤美穂・山上龍子（2010）「介護保険施設利用者と留学生の会 話の分析－山形地域語の理解を中心に－」『山形短期大学紀要』42, pp.13-26
スリーエーネットワーク（2012）『みんなの日本語初級 I　第 2 版』
高村めぐみ・内藤真理子（2016）「関西在住短期留学生の方言意識と習得意欲」『関西学院大学日本語教育センター紀要』5, pp.23-30
立川和美（2014）「高齢者介護活動に向けた方言教育に関する一考察－茨城方言をめぐる留学生の実態」『流通経済大学社会学部論叢』24(2), pp.137-158
林伸一（2010）「外国人のための日本語教科書『おいでませ山口』の歩みと今後の課題」『山口大学文学会志』59, pp.115-129
文化庁（2000）「平成 12 年度国内の日本語教育の概要」http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9218806/www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/jittaichousa/h12/gaikoku_6_09.html（2020 年 4 月 23 日閲覧）
文化庁（2019）「平成 30 年度国内の日本語教育の概要」https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_jittai/h30/（2020 年 4 月 23 日閲覧）
細川英雄（1992）「日本語教育と方言意識－金沢市内日本語教育機関での調査から－」『日本語教育』76, pp.21-30

(Received:June 18,2020)
(Issued in internet Edition:July 1,2020)